

Title	ヴィクトール・ジッタ著 『ゲオルグ・ルカーチのマルクス主義』： 疎外・弁証法・革命
Sub Title	V. Zitta, Georg Lukacs Marxism : Alienation, Dialectics, Revolution
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1967
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.40, No.11 (1967. 11) ,p.112- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19671115-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Victor Zitta,

Georg Lukács' Marxism:

Alienation, Dialectics, Revolution.

The Hague, Martinus Nijhoff, 1964, xv + 305 pp.

ヴィクトール・ジッタ著

『ゲオルグ・ルカーチのマルクス主義』

——疎外・弁証法・革命——

—

『歴史と階級意識』（平井俊彦 訳未来社）の訳者あとがきに、原著者 G・ルカーチは本書の公刊・翻訳を望んでおらず、許可もしなかつたが、ひろく世界の思想界のなかで本書のもつ古典的地位、わが国における思想にたいする有益な役割を考え、あえて邦訳をした、原著者の意にそいえなかつたことを深くお詫びしたい、という趣旨のことが書かれている。ここに書評しようとしている『ゲオルグ・ルカーチのマルクス主義』の著者 V・ジッタによれば、ルカーチは『新しいハンガリア文化をめぐって』（Új Magyar Kultúrélet, 1948）という論文集のなかで、「わたしが自己自身の発展によつて超克したところの、そして不適切なる方向に動きつつあつたところの」作

品をひとはそのままにして置くべきだ、と主張している（五頁）。『歴史と階級意識』にたいする原著者の態度は、ここに如実に示されているとみてよ。

ルカーチが何故このように《やましい過去》を恥じるのかはよく知られた事実である。すなわち、この著名な本は「マルクスの方法の本質を正しく理解し、正しく適用することであり、いかなる意味でもこれを《修正する》ことではない。……本書は……マルクスの学説を、マルクスの意味で解釈し、説明する以上のことを要求するものではない」（『ローザとマルクス主義』平井俊彦訳、ミネルヴァ書店、まえがき）ことを目的としながら、その運命は悲しいものであつた。彼は、一九二四年のコミンテルン第五回大会においてジノヴィエフの批判に曝された。彼のマルクス主義理論は、とくに西欧マルクス主義者たちの間で絶賛されたにもかかわらず、ヘーゲルとマルクスとの方法的関連を示した野心的企図は《修正主義》の烙印を押され、その結果、彼はハンガリー共産党中央委員会から除名されることになつた。ルカーチにとつて一九二四—二五年は決定的な時期であつた。三十年代に彼が文筆活動を再開するまで空白期間がつづいた。爾後、彼はその《正統》マルクス主義を自己批判し、二十年代の立場を克服してゆくのであるが、『歴史と階級意識』はかえつてルカーチの思想を際立たせたまま取り残したのであつた。

このようなルカーチの思想を、ジッタは本書において、マルクス主義へと漸次発展してゆく時期（第一部 疎外と弁証法——一九〇八—一九一六年）、共産主義への接近とハンガリー革命に直接参加した

時期（第二部　ロマン主義とジァロバン主義——一九一七—一九一九年）、マルクス主義のイデオロギー的明晰化が示された時期（第三部　歴史と階級意識——一九一九—一九三三年）に区分し、ルカーチの思想構造内部での「美学から政治理論化への冒險的な遊行」（二一頁）を巧みに跡づけている。本書はルカーチのマルクス主義思想の核心を明らかにすることを目的としたものであるが、それと同時に、いわゆる呪われた詩人のロマン主義的マルクス主義というものを見事に描いている。ジッタによるルカーチ像は、肖像というより戯画に似ているかも知れない。しかしながら、ルカーチ、あるいはその類いの人間タイプが如何にマルクス主義思想に反応し、自己とその周辺の世界の問題を処理するか、という問題に興味深い示唆をあたえている。ジッタの『ルカーチのマルクス主義』はたんなるルカーチ論にとどまらず、H・ラスウェルがその序言に書いているように、「……私のおよび公的危機が自己中心的パーソナリティにたいして、《全体的真理》——世俗のものであれ神聖なものであれ——の名のもとに殺害を犯す機会をあたえるコンテクストというものに照明をあたえている点で永遠の重要性を有している」と言えよう。

二

若きルカーチの苦悩は、「もうひとつの、より真実なる自己への強烈な郷愁」という詩人へのはかない憧憬であつた。「詩人でもなければ哲学者でもなく、しかも両者たらんとした人間——ルカーチの呼ぶ《問題的な人間》」（二四頁）とははかならぬ彼自身であつた。

詩を哲学的に、哲学を詩的に解釈しようとする試みは初期の作品『魂と形式』に示されている。この評論という形式こそ、詩的なものと哲学的なものとの間をたゆたう引き裂かれた内面の魂に適合した表現スタイルである。ルカーチが《思想詩》について語る理由もまたそれである。これらによつて彼が探究したものは生の究極的問題であり、その探究は挫折に終らざるを得なかつた。と言うのも、それらは心情の主観的世界のなかでしか解決できない問題であるからだ。ルカーチは、肉体的に実現不可能なプロメテウスの鎖を精神的に断ち切つたところでロマン主義者へと転換したわけである（四一頁）。孤絶した主観性は經驗的現実からますます退行する。一九〇九年から十一年までの間、ルカーチの心を奪つたものは自殺、死、無意味さ、悲劇など、誰にも説明し得ない思想のヒステリカルな肥大化であつた。これは思想の危機状況であり、その克服のために、ルカーチの魂は神へ赴かなかつたけれども、唯一の全体者との神秘的体験によつてみずからを救済しようとした。

しかしながら、神に見捨てられた世界において超越的なもの到自己を停泊させることがどうして可能であろう。われわれの認識と行為、自然と心情、自我と世界との間の深淵は永遠化されてしまつた。ルカーチは叙情詩のような言葉で告げる、「星空が、歩みうる、また歩むべき道の地図の役目を果たしてくれた時代、その道を星の光が照らしてくれるような時代は、しあわせである。……世界ははるかに遠いが、しかもわが家のようである。なぜなら、心情のうちに燃えている火は、星たちと同じ本質的性質をもっているからであ

る〔『小説の理論』原田義人・佐々木基一訳 河出書房二七一頁〕。超越的な故郷への道がもはや迎れなくなると、絶望のロマン主義者は方向転換せざるを得ない。内在的、行動主義的、歴史主義的な定位づけ、つまり神秘主義からマルクス主義へと移行していくのである。《悲劇》の形而上学からマルクス主義の《形而上学》への方向転換——このところにルカーチの弁証法思想が横たわっている。

ジッタはこのようなひと時、この若き魂の情熱に、《グノーシスの行動主義》と《時間》との観念を認める。グノーシスの行動主義とは、ルカーチが『精神の貧困』のなかで用いた言葉であつて、一切の思想を一切の行為あるいは心情へ転化せしめるトータルな行動主義の態度（五五頁）である。生の悪しき無限定性から、世界の濁した多様性から逃れ去る方途はかかる純粋な行動主義となる。それはデモニッシュな眩惑のなかで、理想と現実、精神と心情との距離を忘れる。精神の貧困とはまさにイノセントなのだ。この行動を正当化するものは何か。それは黙示録的な時間である。ジッタは『小説の理論』からつぎの一節を引いている。「時間の充実ということ、生の自己否定であり、したがつてまた時間の自己否定であるとしても、時間は生の充実にほかならない。……何びともその流れの明白な方向に逆つて泳ぐことはできないし、何びともその予測したい流れを、先験性^{ア priori}という堤防で制御することはできない。とはいえ、なおひとつの諦めの感情は生きのこるのである。これら一切のものはどこかからやつてきたにちがいないし、どこかに行くものにちがいない、という感情、その方向がたとい如何なる意味を

もちあわさないとしても、ともかくそれはひとつの方向である、という感情である。そして、この割りきつた男らしい感情から、あの時間体験が生まれてくる。行為をよび起こし、また行為から発するがゆえに叙事詩の正嫡ともいふべき時間体験、すなわち、希望と追憶とが生まれてくる」(同上三四九頁)。

三

あなたの魂があなたに命ずるのです、魂に従がわなければ、滅びの道にゆかねばなりません。けれど従つてみても同じ道をゆくのです。

(ヘルダーリン『ヒュペリオン』より)

一九一八年ルカーチはハンガリー共産党に参加した。それは彼の悲劇的内面性の必然的な運命であつたのか。第一次世界大戦後の政治的渾沌^{カオス}、とりわけハンガリーの敗北の凄惨な状況は、共産主義者に絶望のなかの希望をあたえた。ハイデルベルクの美学講師の地位を去つて政治にみずから犠牲にしようとした彼には、ある隠された躊躇があつたであろう。トーマス・マンの言うように、ドイツにはマルクスとヘルダーリンとの間の親和性がある。ルカーチが直面した選択はマルクスかヘルダーリンかであつた。かの魂の詩人の如く狂乱か、あるいは革命家の実践か、彼は後者の道に自己を放棄した。この自己放棄への情熱をジッタはキルケゴールとレギーネ・オルセンとの恋愛に較べている。ルカーチにとつてレギーネは彼自身の艶やかなブルジョワ的環境であつた。そしてキルケゴールの神は

ルカーチの共産党に当つている(八九頁)。パソロジーからポリティックスへ、「ルカーチの理想は、……ある意味で自殺への彼の衝迫の昇華なのであつた」(九〇頁)。

一九一九年三月二十一日ベラ・クーンは共産主義政権を組織する。ハンガリー・コンミュニオンは僅かに一三三日間つづいた短い実験にすぎなかつた。教育人民委員に任命されたルカーチは、文化と教育にどのような役割を演じたか。文化的洗脳、あるいは彼みずから言う《魂の革命化》は徹底した全体主義的方法で遂行された。それはベラ・クーン、レーニンによつて非難された程だ。文学、演劇、絵画、彫刻、音楽、教育など、各分野にルカーチの活動がおよぼした影響は破壊的であつた。例えば演劇界では、劇場は国有化され、その組織は集権化された。ハンガリー・ミュージカルは上演禁止され、黨員でなければ劇作家は作品を上演する機会を得られなくなつた。ルカーチはプロレタリアートの魂を革命化するため、午後の興行を企画した。彼らは否応なく、工場から劇場へ長蛇の列をつくらされた。高尚な芸術より休息を願う労働者たちは、ある時俳優が舞台からストライキを宣告すると、最高の芝居に対してよりも一層大きな喝采を送つたといわれるのも無理からぬことであろう。ともかくルカーチの行動と政策は、彼の理論は別としても、「フアナティックなエリート主義の所産」(二〇七頁)であつたし、その目的とはまつたく逆効果を生ぜしめる弁証法の不条理な性格を暴露したものである。

四

ルカーチ的マルクス主義の世界観は、疎外と弁証法との二つのテーマをめぐつて展開される。それはマルクス主義とヘーゲル主義との輻合、あるいはマルクス主義のヘーゲル化である。「歴史と階級意識」における「物象化とプロレタリアートの意識」(Verdinglichung und das Bewusstsein des Proletariats)にしても、『資本論』のヘーゲルの基礎を証明しようとする試みである(一三九頁)。ルカーチの疎外概念は「自らの作り出した環境が人間にとつてもはや生家ではなく牢獄である」(『小説の理論』三〇二頁) ような意識である。資本主義社会における疎外は、人間の相互関係の「物神的な対象性形態」(『ローザとマルクス主義』四〇頁)としてあらわれる。このことは、思想的には、ブルジョワ古典哲学のなかに物象化・アンチノミーを産みだしているのである。ルカーチによれば、ドイツ古典哲学は、思惟がみずからの創造物を把握できると考える点で偉大だが、結局は《物自体》という限界に突き当つている。世界の総体性把握ということは、弁証法によつてはじめて可能となる。近代的我の分裂、その疎外は弁証法という美学的な原理によつて超越されるかの如くである。ジッタはつぎの言葉を引いている、「世界は審美化されるか、それとも審美的原理は客観的現実を構成する原理へと高まらざるをえない」(『歴史と階級意識』一二三頁)と。

このように、物象化克服の可能性が美学的ヴィジョンのうちに示唆されるが、それは歴史における人間自身の行為に歴史変革として

具体化されねばならない。そして歴史的《現実》は「総体性」として把握されるべきものである。ルカーチは、主体としての総体性、それ自身が総体性である主体とは、階級としてのプロレタリアート以外にないと言う。階級意識こそ物象化された存在構造を打破し、歴史の主体—客体の同一性であるからだ。かくして、プロレタリアートは人間の実存的諸条件のトータルな否定につらなる。無論そのようなプロレタリアートとは現実のそれではない。階級意識の自己意識化はヘーゲル主義的な秘儀に似たものではないか。プロレタリアートがルカーチの哲学に見出す《精神的な武器》が現実化されたら、それはジッタがG・マルセルの言葉で語るように、「狂信化された意識」とならざるを得ないし、また「キリスト教的終末の内在化」と異ならないであろう。

ルカーチの思想のトルソーを接着しているものはその弁証法である。「流動化」概念(『*Mitbegründe Begriffe*』)、総体性(Totalität)のカテゴリー、媒介(Vermittlung)のカテゴリー、これらがルカーチ特有の弁証法概念なのだが、その融通無礙の弁証法的思惟によつて、「主体と客体、理論と実践、心情と理性、自由と必然等々の同一性、もしくは統一性」がなし遂げられる(二〇五頁)。社会的、歴史的に絶滅され、粉碎され、部分体系のあいだに分割された人間は思想のうえで再生される(『歴史と階級意識』一二三頁)。すなわち、「みづからを完成する総体としての人間(der Mensch als in sich vollendete Totalität)」(同上二二三頁)としてである。このような弁証法的人間、ジッタはこれを「マルクス主義的超人」と呼んでいる。彼には

すべてが許されるであろう。ルカーチは《倫理的な》殺害を容認する——少なくとも容認していた。「悲劇的に倫理的たることが可能な人間、その人間だけの殺害行為——彼は知つている。絶えず寸分の疑いもなく知つているのだ、どんな状況のもとにおいても殺害は許されないと、いうことを」(Turkaos, *Tarkiva es Ethika, Budapest, 1919, p. 13.* 二三四頁のジッタの引用によるもの)と、ルカーチは絶叫する。「悲劇においては、犯罪は何ものでもないか、ひとつの象徴かである」(『小説の理論』二九九頁)けれども、政治は悲劇や犯罪なのではない。

プロレタリアートの自己聖化は、ルカーチの革命理論と組織論にも投射されている。「プロレタリアートの階級意識またはその歴史的使命の確信の担い手となる」という崇高な役割(『ローザとマルクス主義』七八頁)は、まさに階級意識のゲシュタルトたる共産党に受肉化される。ブルジョワ社会における個人的自由ではなく、真実な自由の意識的な総意(Gesamtwille)が党にほかならず、党の内的活動は「組織上の決定的な闘争手段としては、党员をして全人格をさげ、(in ihrer Gesamtpersonlichkeit) 党活動に参加させる」(相沢久訳『組織論』未来社二〇〇頁)。そして、共同体において、権利と義務とが分離している状態・人間が自らの社会化関係から切断されていることについての、組織的な形象形態……を放棄しうるのは、……共同体における行為が、そのすべての参加者自身の重大問題となつたときであろう(同上六五頁)。ここにおいて一切が解決される。マルクス主義的革命は魂の救済となる。共産党は一種の政治

的な《教会》である。「マルクス主義は、政治的《宗教》として、それ自身の政治的《地獄》を産みだしておき、ついで意識のなかでそれからの救済を提供しようと装う」(二四九頁)からである。

五

一九四六年から四七年にかけてブダペストの Pazmany 大学で、「ヘーゲルにおける弁証法的思惟の起源」というルカーチの講座を聴いた著者自身は、「彼に逢うと、学者的な態度の明白なフアウスト的熾烈さの傍らに、明瞭なメフェイストフェレス的特質を直ちに感じとるであろう」(七頁)と述べている。そのような複雑異様な人格のうちに、ジッタは完全なマルクス主義者の姿をのぞきみる。「完全なる人間についてのルカーチの概念は、マルクス主義的偽瞞ではない。それは、天国から人間的次元へと完全性の概念がどのように移行するかについての、真正なマルクスの概念なのだ」(二二二頁)。ルカーチ化されたマルクス主義、マルクス化されたルカーチ主義、それこそ「悲劇的ナルシシズム」(二五〇頁)であるゆえに最も美しく、かつ不毛なものでもあらう。

(奈良 和重)